

Title	SDにおけるExampleの意味と、Example-Giverの役割
Author(s)	稲葉, 一人
Citation	臨床哲学のメチエ. 9 P.30-P.32
Issue Date	2001
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/6456
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

行方法は変わる。時間や参加者の制約と目的を考慮し、何を問うかに重点を置いたり、問いよりも論拠づけに重点を置いたり、答に至ることを第一に、SDを進めることができる。また、哲学的探究のためだけでなく、倫理的決定やその訓練を目的にSDをする試みもある。(例えばホルストによるディレンマ・トレーニングを参照。) SDはグループでの哲学的探究の有効な一方法に見えるが、その方法の検討や習得、拡張は、さらに今後の

実践における課題である。

なお、今回のSDの進行の工夫として、自分で書くことが思考を助け、時間の節約になったことと、一つの例から得た原理を他の例に当てはめて原理の普遍性を検討したことも特に記しておく。

ベアータによる遡及的抽象を目指すSDを体験して、以上のように、SDの実際上の制約や、進め方について考え、課題を得ることができた。

(あいざわくにこ)

SDにおける Exampleの意味と、 Example-Giverの役割

稲葉一人

2001年9月8、9日と阪大キャンパスで行われた、「英語によるSD」に参加する機会を得た。SDへの参加はこれで2度目(いずれも英語)であり、今回は奇しくも Example-giver の役割もすることとなった。私は、自ら Mediation (調停) という紛争解決技法を法律家に教え、いかに争点について話し合いを進めるかについて研究していることもあり、SDには兼ねてから興味を有し、期待を持って参加したが、それを裏切らない極めて有意義なものであった。FacilitatorのオーストリアのBeateさんを始め、企画をしてい

ただいた、臨床哲学の皆さんにお礼を申し上げます。

本来は、私の役目として Mediation との比較をした論考を書くべきであろうが、それは別稿に譲るとして、本稿では、Exampleに焦点を当てて考えてみることにする。

SDでは、Exampleに関して概ね次のようなルールがある。各自が、主題に関して適切と思う、具体的で自らが経験した Example を提示する、その中から1つの Example を選ぶ、選ばれた Example の提供者 (Example-giver) は、そ

れに関して参加者から求められた必要な情報を提供する、Exampleから離れずに、状況を検討し、次第に一般的な根拠、その背後にある価値・原理を追求するというものである。つまり、SDでは(1つの)Exampleが、SDを進めるにあたっての導きとなっているのである。Exampleには、幾つかの条件が課せられる。主題に関連すること、自ら経験したこと、簡潔に記述されること、過去の出来事で、既に完結していること等である。

そこで、参加者とGiverに則してもう少し掘り下げて考えよう。参加者は、主題(我々の場合は、What is a good teaching?であった)に関連するExampleを選定する作業をする。この作業は、印象深い出来事から、直感的に行われる場合もあるが、通常は、主題は何を求めているかを分析し、自己の複数の経験を想起し、その中から適当と思われるものを選別することとなる。つまり、この段階で、参加者は、主題について自ら考え、自己の経験を、その主題との関連で位置付けることを求められる。

各人はExampleを述べ合う。述べ方は各人各様である。背景を分かってもらおうと、詳細な事情から述べる人もあれば、Exampleをそのものをsimpleに描写する人あり、また、熱のこもった描写のし方をする人から、しかたなしにExampleを示す人もある。このような過程は、対話において、極めて大事なintroductionである。人がお互い知らないものを示し合う、しかも、自ら体験したことを、それぞれ異なった表現方法で行う、非言語的な、tone、emotionをも含めて表現する行為は、表現者の「communication行為」と

して、communication前提(その人のpersonalな情報)を共有する行為といえる。

参加者は、各自の示したExampleの中から自分で主題に相応しいExampleを選択する。Exampleを各自提示することにより、それぞれの必要なpersonalな情報を得て、これから1つのExampleを中心に、対話のjourneyを楽しくできるか、自己の提示したExampleとの関連性・共通性があり、関心を持続できるのか等、様々な考慮の上で決断を下す。自己の提示したExampleを中心に対話を進めたいという思いがある反面、自らそれに勝るExampleを指示する義務があるという葛藤の中で、選定作業は進められる。

Example-giverは、それに関する情報を、自らではなく、参加者が必要と認めた範囲で提供する。Giverにとっては、sensitiveな情報も、求められると示す必要があり、toughな作業である。自分の経験を人に伝える作業とは、自分の思いをそのまま伝えるのではなく、相手の必要に応じて、場合によっては、一つのstoryを有する経験を、あえて分解して提示する必要があることを理解する過程でもある。

参加者は、Giverの真摯な情報提供を受けて、自らその意味を理解しようと努



めることになる。ExampleはGiverだけが「経験」したものでありながら、だれもが、そのExampleを、再度ここで対話を通じて、「経験」することになり、Exampleは個人の経験から、皆の共有資源となる。

Exampleから離れず、状況を検討し、次第に一般的な根拠、その背後にある価値・原理を追求する作業は、極めてcomplicateな作業である。具体的なExampleと、(抽象的な)原理原則とをつなぐ対話の円滑さを保つことは、Facilitatorの腕の見せ所であろう。しかし、時には、Exampleから脱線した発言、かみ合わない発言がとび出す。このようなnoiseとでもいうべきものが、逆にこれを乗り越えた際のお互いの信頼を生む。

Giverは、Exampleを脚色(理想的に描写)しがちだが、これはある程度参加者からの質問等により是正される。その隙間は、Giverの倫理義務となる。しかし、自分が過去に経験した出来事なのに、SDの中で様々な修飾(当時気づかなかったことに気づくということも含めて)を経て、本人自身が、SDの中で再度「経験」することとなる(この意味で、SDには、新しい経験が、二つの場面で生じる)。

このように、Exampleを中心にとってみても、Exampleは、対話を促進するために、順序立って、参加者に一つ一つの判断過程を経験させるtoolとなっていることがわかる。また、Giverは、新たにSDの中で「経験」し直すために、「transformation」を起こすことがあるのではないかと思う。私自身、自らのteachingに対する考えは変わったと思う。

SDでのExampleの条件がon-going-issueでないことや、参加者に参加の意欲があることは、かえって、様々な場面での参加者に同調の圧力がかかり、かつ、それに屈し易くさせることの原因となり得るなど、SDをこのまま、現実的で、切迫したon-going-issueに適應できるかには疑問があろう。しかし、様々なバリエーションの中で、SDのやり方と、他の方式(例えば、Mediation)とを融合させて「実践していく」ことこそ、SDの力であると思う。理性的な対話などできないと諦めるのではなく、また、理性的な対話ができないと思われる問題が増え、阻む環境が高まれば高まるほど(米国同時多発テロにおける世界とタリバンとの対話など)私はSDを含む、人の対話にかけてみたいくなる。これは、SDの、参加した私への、一つのmessageだと思う。

(いなばかずと)



ベアーテと対話者たち